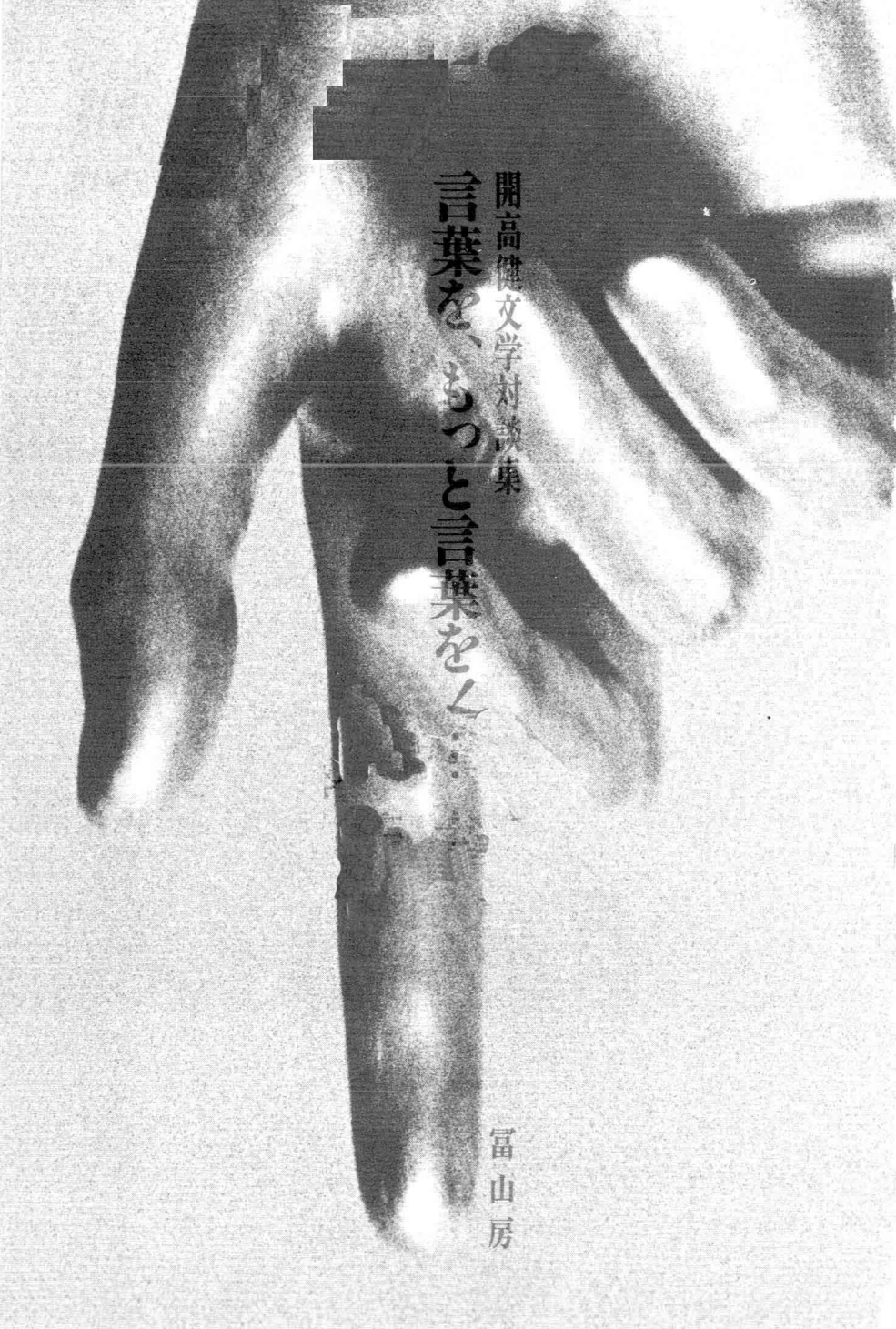


開高健文学対談集

言葉を、もつと言葉を、……





開高健文学対談集

言葉を、もつと言葉をく……

富山房

言葉を、もっと言葉を！

昭和五十七年六月二十五日 第一刷発行 ©

定価一、三〇〇円

著 者 開 高 健

発 行 者 坂 本 起 一

製 印 刷 本 図書印刷株式会社

〒二〇一 千代田区神田神保町一丁目三番地
発 行 所 合 資 会 社 富 山 房

電話 〇三二九一―二一七一
振替 東京五―五四五二七

Printed in Japan, 1982.

(落丁・乱丁本はおとりかえいたします)

ISBN4-572-00768-3

初出・対談者一覧

言葉の愉しさ、難しさ——『アメリカの雑誌を読むための辞書』
をめぐって

昭和55年9月1日，新潮社「波」129号。

水上峰雄（みずかみ・みねお） 1935年生れ，足利工業大学
教授（英語学）

われある，ゆえにわれあり——不定型の時代の文学談

昭和46年3月30日，筑摩書房「人間として」5号。

小松左京（こまつ・さきょう） 1931年生れ，作家。

西鶴の文学風土

昭和52年1月31日，小学館「現代語訳西鶴全集」第9巻
『日本永代蔵』月報。

陣峻康隆（てるおか・やすたか） 1908年生れ，国文学者，
早稲田大学名誉教授。

ジャン＝ポール・サルトル——その豊饒と渾濁

昭和55年7月1日，新潮社「新潮」77巻7号。

白井浩司（しらい・こうじ） 1917年生れ，慶応大学教授
（フランス文学）。

言葉は知性であり，感性である

昭和56年1月1日，婦人生活社「素敵な女性」3巻1号，
鈴木秀子（すずき・ひでこ） 1932年生れ，聖心女子大学助
教授（国文学）。

ユーモア・文学・人間

昭和55年9月30日～昭和56年2月28日，立風書房「現代
日本のユーモア文学」付録1～6。

吉行淳之介（よしゆき・じゅんのすけ） 1924年生れ，作家。
丸谷才一（まるや・さいいち） 1925年生れ，作家。

開高 健（かいこう・たけし） 1930年生れ，作家。

開高 健

単行本未収録エッセイ

言葉の落葉

全4巻

I 昭和30年から昭和35年まで 付載／同人雑誌時代

II 昭和35年から昭和38年まで 付載／『洋酒天国』時代

III 昭和38年から昭和44年まで 付載／『トリス』時代

IV 昭和44年から昭和56年まで 付載／補遺（今秋刊）

小説家としてデビューの後、著者が折々に発表したエッセイのうち既刊単行本未収録のものを四巻にまとめて刊行。文学は無論のこと映画、美術、食物、流行などについて、政治的事件、戦争、度々の外国旅行について、自伝的断片もその間に織りまぜつつ、ユーモアとウィット横溢する独自のスタイルをもって語りかける。

四六判 平均三六〇頁 各巻一・五〇〇円 千三〇〇円

目次

言葉の愉しさ、難しさ

——『アメリカの雑誌を読むための辞書』をめぐる

水上峰雄 5

われある、ゆえにわれあり

——不定型の時代の文学談

小松左京 21

西鶴の文学風土

暉峻康隆 77

ジャン・ポール・サルトル

——その豊饒と渇渴

白井浩司 93

言葉は知性であり、感性である

鈴木秀子 155

ユーモア・文学・人間

吉行淳之介
丸谷才一 173

装
幀
坂
根
進

言葉を、もつと言葉を！
…

言葉の愉しさ, 難しさ — 『アメリカの雑誌を読む
ための辞書』をめぐって

水上峰雄



さまざまな辞書

開高 英語の字引で一冊、鮮明な記憶のあるものがあります。戦後の闇市で売っていた明治時代の、誰が編纂したか忘れたんですが、英語を川柳、戯れ句の類でおぼえさせるのです。例えば democracy のところを見ると、「民主主義、何でも暮しよいが良い」とか、doctor は「医者を毒たあ、これ如何に」と洒落のめしてある。

水上 横浜あたりで明治の初めごろ作られた辞書によくありますね。最初は聞き書きで、例えば「家」は「バラキ」と書いてある。兵隊の宿舎のことを“barracks”と言っていたからでしょう。それが書き言葉が入ってくるにつれて、「ハウス」とか「ハウス」と変わってくる。みな薄い和綴のものです。

開高 読んでほのぼのとしてきますね。西洋犬のことを古い東京言葉で「カメ」と言いますが、西洋人が飼犬を呼ぶとき「Come out!」と言ったのが、当時の日本人には「カメ」と聞えたという解説入りの辞書を読んだことがあります。今では「カメ」そのものが死語になってしまつて、外来語辞典にも出てきませんが。

水上 英語にはその類の言葉を集めた辞書が多いですよ。最近死んだエリック・パートリッジという人は、俗語辞典だけで四つ作っています。歴史的に見たもの、現代語の俗語辞典を二冊、さらに乞食や浮浪者の言葉ばかり集めたもの。その他にも cliché（きまり文句）を集めたり、しまいにはキャッチフレーズまで集めている。今で言うなら、「そうでない人もそれなりに」というようなものですね。例えばハンフリー・ボガートが初めてもらったわずか二語の科白、*“Tennis, anyone?”*（誰かテニスをしませんか）——本人は否定していると他の雑学辞典には書いてありましたが——これも元はキャッチフレーズだった。それが何に使われていたか、などというのを調べています。

開高 夜眠れない人のためにいいですなあ。それに比べると、ビアスの『悪魔の辞典』、フロールベールの『紋切型辞典』などはあまり面白くない。同時代に対し「叩きつける」ことに熱心になるあまり、時代の移りかわりによる風化に耐えられないのか、いま読んでも面白さを理解できない部分が多い。それこそ無名の人民が言いかわしている慣用句や語呂合わせのほうが長生きすると思うのです。だから作家は黙って小説を書いているに限る（笑）。

水上　やはり自然にある言葉を拾ったほうが、一見無味乾燥でも実は面白いことが多いですね。

開高　そこで今度作られた辞典（『アメリカの雑誌を読むための辞書』、新潮選書）ですが、まず冒頭に聖書から引用された言葉が並んでいます。実際これがよく使われるんですね。ところがこちらは全然無知である。字引を引いて一応は読めても、実はそこに罫わながあって、聖書のもじりがわからないためにその文章の「味」が何もわかっていないことがあります。聖書に限らずとも、今度初めて教えられたことが実に多かった。

水上　日本では語学というと会話を気にしすぎるくらいがありますが、挨拶ばかり上手になっても仕方がないと思うのです。問題は話の内容でしてね。その点「タイム」「ニューズウィーク」などは、いわば情報の宝庫です。また、新しい事象を表わす言葉が極めて早い時期に活字になるのも、これらの雑誌の特徴です。もちろん単語だけ知っていてもこれらを読める訳ではありませんが、よりよく読む手がかりを提供しようというのが、今度の辞書のそもその発想でした。

変貌を強いられる言語生活

開高　今日の我々の言語生活は大変な変化ぶりですが、今から百年、百五十年前に書かれた英語の書物が、日本の江戸時代に書かれたものよりよほど容易に読め、かつ味わえることが多い。

これは日没することなかりし大英帝国の国力に依るところ大ではないかと思うのです。つまり、外界からの影響をはじき飛ばして、自分の言語感覚内だけで生きていられたことが、英国人の言語の安定を、少なくとも今まではもたらしてきたのではないですか。

水上 そうかもしれませんね。しかし今やどの国にもそんな力はない。米語が混乱したと言われる一九六〇年から七〇年にかけて、ヴェトナムで何年か捕われていた兵隊が帰って来たときには、国防総省がその間に現われた新語集を作って彼らに配らなければならなかったほどです。開高 英語の変化も、これまでの百年と今後の百年では大差が出るでしょうね。

水上 アメリカでは、最近五年おきぐらいの間隔で新語辞典が出ています。これまでなら辞書に入る前に消える、一過性の流行語にすぎなかったはずの言葉を、辞書編集者がともかく記録しておこうではないかと言うまでに変わってきました。

開高 イスラエルではヘブライ語を話しますが、現代の言語生活を、この二千年前の言語でこなしていくために厖^{ぼうだい}大な努力をしています。例えば原子爆弾。二千年前に「爆弾」という言葉はなかった。しかし「武器」という言葉はあった。また「最も小さい物」を表わす言葉もあった。そこから新しい合成語を作って、「今月のイスラエル語」として新聞で発表するのです。ところがその言葉を若者が使ってくれない。建国わずか三十年で、ジェネレーションの間に通訳が要るほど、若者は若者の言葉を喋^{しゃべ}っている。あらゆる国が、何年おきに新語辞典を作らねばならない言語生活を今、強いられると言っている。

水上 アメリカで一年にどのくらい新語が生まれるか調べている人がいます。あらゆる新聞、雑誌から新語を含む記事を切り抜いて並べて、雑誌形式に編集して会員に配っている。ただし言葉の定義は一切しないで、その記事自体に意味を語らせています。それが題名のフルネームから頭文字を取って、通称「Quarrel（喧嘩）」というのです。

開高 それは私も見てみたい。それほど現代において言葉は変化しているのですね。ただ、私も職業上言葉の変遷には関心があるのですが、日本語の辞書では明治以降読んで楽しいものはいっしょにありません。大槻文彦博士が書いた『言海』です。字引ですからどこから読んでもいいし、しかもいぶし銀のような持ち味がありません。それから後の辞書は、正確さを期するあまり、「味」を殺してしまっただけです。味わうことができないんです。

水上 その「味」を殺してしまった原因の一つは、辞書とは正確であるという先入観ですね。ただ、「正確さ」にも難しいところがあって、ウェブスターの今の版が出たとき、問題になりました。今の第三版の編集者は、言葉は生きているものである、だからありのままを書くのがいい、辞書とは本来言葉のありようを記録するものである、と考えた訳です。ところが一般の受けとめ方では、辞書とはある言葉の意味、用法を確定できないとき、決着をつけてくれるものなんです。古い第二版の評価が高いのは、みんなが基準を求めているのに対して、「この用法は良い」「悪い」と言い切ってくれているからです。ところが第三版では、「通常、大文字で始める」などと書いてある。言葉の現実はまだにそのとおりなのですが。

生きるか死ぬか

開高 この辞書にはヴェトナム戦争のとき流行^はった言葉が収録されていますね。よく調べられたと感心したのですが、ヴェトコンのことを“V. C. Charlie”と書いておられる。事実そのとおりなんです。ところで“Charlie”とはもともとアメリカ兵のことで、“Cheap Charlie”と言えば「女の子に一杯おごってやることもできない奴」という意味。問題はここなんですが、“V. C.”をもじって“Victor Charlie”とも言う。アメリカ兵がヴェトコンのことを「勝利者チャリー」と呼ぶのです。私にはどのチャリーが勝っているのか負けているのか全然わからなかったです。これには悩まされましたね。

水上 電報を送るときに使う「イロハのイ、ハガキのハ」と同じ“V for Victor”から来ているんでしょうね。しかし昔ニューヨークで私と同じアパートに住んでいた男が、海兵隊の将校としてヴェトナムへ行ったのですが、彼でも帰って来たとき、兵隊同士の話はよくわからないと言っていました。

開高 そのうえヴェトナム政府軍の将校や兵隊が「ヴェトナム式英語」を使う。例えば作戦を立てる、女性を口説くというとき、勝つか負けるか、寝られるか寝られないか、全部ひっくり返して“Can do, or no can do!”と言う。それをアメリカ兵も面白がって使う。私は横で聞いてい

てサッパリわからない。作戦がどうなるのか、今晚ヴェトコンが攻めてくるのかどうか、生命にかかわることですから、耳も鋭くなるし、連想飛躍もずいぶん発達しました。ところが日本へ帰ってからはヴェトナムでの私の言語生活も切れてしまって、使いみちがない。今日がおそらく、お話する最後のチャンスだろうと思いますよ。

水上 いや Victor Charlie は無理かもしれませんが、escalation, credibility gap, game plan など、ヴェトナム関係の用語で、現在ジャーナリズムに定着した言葉は多いし、決して終わりはしないでしょう。

開高 APのサイゴン支局長に聞いてみたことがあるのです。“Can do, or no can do?”ってどうだ、とね。“Very nice, えらくフィーリングがある”と言っていました。ところで pidgin English (中国、アフリカ等で用いられる、簡略化された英語) は各国で無限の変化があつて興味深いものですが、国際的に通用する pidgin English もあると思うのです。例えば私が有楽町のガード下の焼鳥屋の濛々たる煙の中で水上さんとバッタリ会う。「お久しぶりですなあ——“Long time no see”と言う。“It's been a long time (since we saw each other)”が正統なんでしょうけれど、こっちのほうがピタッときますな。

水上 “Long time no see” は博士号を持っているようなインテリでもよく使いますね。

開高 そういう言葉を集めた字引もぜひ作っていただきたい。我々にとっては実にありがたいんですがね。